青森大学付属総合研究所

ブランディング研究センター
地域貢献センター
観光文化研究センター
SDG s 研究センター

総研だより

第２巻 第１号 2020 年５月 31 日

〒030-0943 青森市幸畑2-3-1 青森大学付属総合研究所 電話 017-738-2001

◇ 目 次

１．新たな地域課題を追究－就任のご挨拶

青森大学付属総合研究所 所長 赤坂 道俊 ．．．1

２．「選ばれる大学」へ独自ブランドを強化 ブランディング研究センター長 中村 和彦 ．．．1

３．平内沖で町民招きイルカウォッチング 地域貢献センター長 清川 繁人 ．．．2

４．今年度の事業計画の概要 観光文化研究センター長 佐々木 豊志 ．．．2

５．2020 年度の活動予定 SDGs 研究センター長 藤 公晴 ．．．3

６．農村を守るフクロウとノスリ SDGs 研究センター客員研究員 竹内 健悟 ．．．5

７．青森大学付属総合研究所紀要・第 21 巻第１号／第２号 ．．．6

▽**総研日誌** ．．．7

▽**編集後記** ．．．7

1．新たな地域課題を追究－就任のご挨拶

青森大学付属総合研究所 所長　赤坂 道俊

2020 年春、世界は COVID-19（新型コロナウイルス感染症）のパンデミックに襲われました。各国の感染拡大抑止策により、モノとヒトの国際間移動は制限され、多国籍企業による国際分業とそれを動力とした経済成長は壊滅的ダメージを被っています。一方、地方経済においては、地域消費に依存する飲食サービス業、アジア新興国からのインバウンドが途絶えた観光業はじめ地域中小企業は感染抑止と行動自粛のために甚大な影響を受けています。

この度の危機は 1929 年世界恐慌や 1973 年の石油危機に匹敵し、90 年代初めのバブル崩壊や 2008 年リーマンショックのダメージをはるかに上回るものです。歴史的な異常事態にあっては、国や自治体によるなりふり構わぬ支援が必要です。早晩、ワクチンや治療薬の開発がなされるはずですが、それまでは、個々の企業と人々の営為でこの困難に耐えざるを得ません。しかし、この危機への積極的対応が可能であれば、それは、業態革新やワーキング・スタイルの革新の契機となり得ます。

シンポジウムや公開セミナーなど私たちの今年度の活動も新型コロナ感染抑止のために大きな制約を受けますが、リモート・ワークやネット活用など様々な可能な方策を探り、新たな活動を展開したいと考えます。

総合研究所と傘下の四センター（ブランディング研究センター、地域貢献センター、観光文化研究センター、SDG s 研究センター）は「総合的、学際的な研究を行い、研究成果を地域社会に還元し、青森地域の活性化と文化の向上に資すること」を組織目標としています。今年度も所員の総力をあげて多角的な研究活動を進め、今回の COVID-19 拡大の地域への影響分析など、新たな地域課題に取り組んでいきたいと思います。

2．「選ばれる大学」へ独自ブランドを強化

ブランディング研究センター長　中村 和彦

周知のように、18 歳人口が大幅に減少し、いわゆる“大学全入時代”に突入した現在、日本の大学は、かつて経験したことのない未曽有の危機に見舞われています。大学数過剰という厳しい競争環境下において、定員割れ、赤字経営、募集停止、等々の用語が一人歩きする昨今、かかる事象を回避するには、世間から「選ばれる大学になる」ほかに道はございません。

そのために不可欠なのが、青森大学のブランドを構築し、それを積極的に活用していくことに他なりません。ブランディング研究センターでは、独自のブランドをより強固にしていく活動に専念してまいりたいと考えております。

青森大学を取り巻く数多くのステークホルダー（受験生、保護者、在学生、教職員、卒業生、地元企業、地域社会、地域住民、等々です）に対して、正確にメッセージを発信し、継続的に愛される（選ばれる）大学になるため、広報とも連携し一丸となって「大学の魅力」を発信していく所存でおります。

今年度は、設立初年度に実施できなかったブランディング計画を立案するために、まず、文献考証及び学内外の調査から始めたいと思っております。

３．平内沖で町民招きイルカウォッチング

地域貢献センター長　清川　繁人

青森大学は「地域とともに生きる大学」をスローガンに、地域の皆様と連携し、さまざまな地域貢献活動に取り組んできました。しかし、活動の大部分はイベントの開催及び参加が主となり、新型コロナの感染拡大防止のため、計画された行事やイベントのほとんどすべてが中止となっていることと存じます。

こうした中、各学部、教員、経営戦略局及び部活動等が現在実施している、または今後計画している学外との連携事業を把握するため、先般、情報提供を呼び掛けるメールを発信しましたが、未だほとんど返信がない状況です。今後も、進行中の連携事業、または新たに開始予定の連携事業がございましたら、お知らせくださいますようお願いします。

地域貢献センターでは、包括的連携協定を締結する青森市、平内町及び三戸町との事業実施を優先的に進めてまいります。

既に、平内町とは緊急事態宣言が解除された５月１６日と５月３０日の２回、イルカウォッチングに平内町民を招待し、これまで地元で見過ごされてきた町の魅力を紹介しました。

１回目は平内町に住む親子４組と役場職員２人が乗船し、久栗坂沖でイルカの群れを発見しました。野生のイルカを見るのが初めての子供ばかりで、夢中でイルカを追いかけていました。２回目は平内町民のほか、浅虫温泉海扇閣の従業員が観光プラン開発の参考のため乗船しました。夏泊大島沖でイルカの群れを発見し、その後次々と群れに遭遇、全部で 100 頭以上のイルカを観察できました。参加者たちは何度も歓声を上げて喜んでいました。このツアー２回目には毎日新聞の記者も乗船し、31 日付の地方面に掲載されております。

２日目のツアーメンバー

夏泊半島沖合のイルカの群れ

４．今年度の事業計画の概要

観光文化研究センター長　佐々木　豊志

新型コロナ感染症対策で大きな影響を受けている観光産業の今後の動向が大変気になる昨今です。観光文化研究センターの年度始めにあたり今年度の事業計画がほぼ見えてきましたのでお知らせをいたします。

センター設立当初から取り組んできた観光人材の育成事業「産官学連携による観光産業の中核人材育成・強化事業」の流れを汲み、これまで関わっていただいた観光事業者との連携は引き続き強く取り組んで参ります。早速４月末から５月の GW にかけて、事業計画案作りを行いました。さらに副センター長の清川繁人

先生がこれまで取り組んできた「むつ湾のイルカツアー」を観光資源として再考するための視察の計画をしました。

観光文化研究センターの今年度事業費は昨年よりも縮小をしましたが、「日本たばこ産業株式会社」の『JT SDGs 貢献プロジェクト』に応募し、この事業と抱き合わせた事業を計画して、当センターが今後の包括的な観光関連の事業構想の支援ができるように進めて参ります。

以下は、今年度の事業計画の概要です

１）体験型観光商品企画ワークショップ連続講座

①自然体験型観光商品開発・人材育成（地域循環共生圏/ツーリズム）

自然体験型観光商品企画開発・人材育成講座

１【山】山岳サスティナブルツーリズム

２【川・湖沼】SDGs ツーリズム

３【海】むつ湾・浅虫・夏泊半島

②暮らし・文化・歴史体験観光商品開発・人材育成講座

１【薬草、ハーブ】ヘルスツーリズム薬草やハーブを素材にプログラムの展開。

２【手わざ、食文化】カルチャーツーリズム、糸、布、刺子、和紙、土壁に用いる靭皮繊維などの自生する環境観察と手わざを体験するプログラムの展開。

伝統食、地域によって異なる発酵・保存食づくりの体験プログラムを展開。

３【縄文、歴史、遺跡】ヒストリーツーリズム

遺跡を巡り、縄文文化が発展した立地条件や背景にある自然と共生する哲学を感じ、縄文の営みを体験するプログラムの展開。

２）新観光イメージ戦略

「雪国あおもり・イグルー王国」酸ヶ湯温泉の観光イメージ PR 支援

①イグルー村建設：イグルーづくりワークショップ：イグルーマイスター

・イグルー王国プロモーション事業、観光イメージ展開事業「イグルー王国」

②イグルーづくり世界大会

・酸ヶ湯温泉・キャンプ場

３）青森モデル「自然体験型観光 DMO」構築事業

①DMO 設立準備・企画会議

②青森大学ヒュッテの活用案構築・・・連続講座の実施拠点整備

４）観光庁　人材育成事業　小樽商科大学連携「青函環境人材育成講座」

５）年間事業報告書作成

５．2020 年度の活動予定

SDGs 研究センター長　藤　公晴

2020 年度 SDGs 研究センターは、昨年度の事業成果（文末の QR コード参照）を踏まえて下記プロジェクトに取り組みます（5 月末現在）。また、この 2 年間の成果を SDGs 研究センターの年報としてまとめる計画です。

1.SDGs 時代の地方創生における高等教育機関の役割に関する調査研究（青森学術文化振興財団助成）

2.環境教育モデル形成推進事業（青森県環境政策課委託）

3.シラカバ樹液プロジェクト（薬学部）

4.ツバキ油石けんプロジェクト（薬学部）

5.平内ハクチョウのまち再生事業

6.勉強会（4, 5 回）

7.SDGs 推進にかかるアジア国際共同研究

8.観光文化研究センターや地域貢献センターなどの連携プロジェクト

▽正課外活動の重要性

まず「SDGs 時代の地方創生における高等教育機関の役割に関する調査研究」と「環境教育モデル形成推進事業」では、昨年度の成果を踏まえて、a.内なる国際化の推進と b.正課外活動参画の支援、c.文理融合の推進、d.明示的に SDGs を運用しない取組の整理、の 4 点に主眼をあてた取り組みを継続する。

特に学生の正課外活動の支援の効果については、目標に向かって頑張る力、他の人とうまく関わる力、感情をコントロールする力など、非認知能力ないしは社会情動的スキルの育成に寄与したことが昨年度の学生ヒアリング調査の結果で示された。こうした点を踏まえながら、今年度は高校生を巻き込んだ正課外活動の支援を積極的に行い、本学のルーブリックとの関連性をより明示的に踏まえた学生の変容に関する調査研究を行う計画である。

昨今の大学教育改革の流れにおいて、正課外活動が学生の成長にとって正課の教育活動に匹敵する重要性を認めつつ、適切な支援等に取り組むことを推奨していることも踏まえて、正課外活動のより明確な位置づけの提示を目指す。

▽薬学部ものづくりプロジェクト

今年 2 年目を迎える薬学部三浦裕也学部長と大越絵実加先生、佐藤昌泰先生らが取り組むシラカバ樹液プロジェクトは、地域の自然資源（湧水、白樺、山椒）を活用した、青森県産ものづくり商品（白樺樹液トニックウォーターwith 山椒未成熟果実 / 白樺樹液シードルなど）の試作品を制作し、SDGs の具体的目標との関連性を示すもので、今年は樹液や湧水の成分分析の実施を通して、学生と地域の関係機関のより幅広い協力を得ながら開発に取り組む。

また、今年度から平内町の協力、連携のもと、同町のシンボルでもあるツバキの種から油を搾取し、石けん等のものづくりのプロジェクトにも着手し始めた。このプロジェクトでは平内町住民はもとより、先述の高校生の参画をより緊密に行いながら、地域の人材の育成と産業の育成を目指す計画である。

▽若者のエレベーター・ツールとしての SDGs

あらためて強調するまでもないが、2030 年における達成を目指す SDGs にとって、2020 年とはその道のりの 3 分の 1 にあたる節目でもある。すでに様々な取り組みを行う各地域の実践者にとってSDGsとは、高圧的な雑音やあやしい PR 活動、ややもすれば不必要や無関係と捉えられがちであるが、2030 年に向けて社会参画や変革を担う生徒や若手世代にとっては、それぞれの関心や関わりに国際性と多面性をもたらすエレベーター・ツールでもある。今年度もこのような「若者にとっての SDGs」の視座を大切にしながら研究活動に取り組む所存です。

▽これまでと今後の予定

3 月中旬～4 月中旬　白樺樹液（334L）採集

5～8 月　湧水の採水

6～8 月　青森県産山椒の採集（薬草園）

東北大学、県庁エネルギー開発振興課 シラカバ樹液およびツバキ油サンプルの元素分析に関する打合せ、分析

7 月　夜越山のツバキ果実 採集に関する平内町役場との打ち合わせ

（8～9 月以降　椿の未成熟、成熟果実の採集）

7 月 3 日(金) 16:00～ 勉強会「ポストコロナ時代のローカルキャリアとキャリア支援(仮タイトル)」 講師：石井 重成氏（本学客員准教授、内閣官房・シェアリングエコノミー伝道師、釜石市オープンシティ推進室長、一般社団法人地域・人材共創機構・代表理事）

会場：340 教室（オンラインでも実施）

7 月 13 日 講演「SDGs と大学の学び」秋田県立大学生物資源科学部

11 月　台湾実践大学との共同ゼミ グローバル英語

11 月 「高等教育における ESD フォーラム」報告発表 @八戸工業大学

11～3 月　椿油を用いた中高生用 地域教材の開発、試験的実施

◆令和元年度青森学術文化振興財団助成事業

SDGs 時代の地方創生における高等教育機関の役割に関する調査研究 成果報告書

６．農村を守るフクロウとノスリ

SDGs 研究センター客員研究員　竹内 健悟

▽りんご園とフクロウ

青森市の西南に位置する浪岡の樽沢地区。ここに2017 年 4 月、「樽沢里地里山を考える会」（会長鳴海和昭、事務局出町鉄昭）が発足した。主な目的は、フクロウをりんご園や周辺の林に生息させ、りんごの木を害するネズミを駆除してもらったり、フクロウを活用したブランド化を図って、地域を活性化させることにある。会員は30 人ほどで、りんご農家と稲作農家からなる。長年フクロウの研究をしている弘前大学の東信行教授を指導者に迎えて学習会を行うほか、フクロウの巣箱の配布や情報交換を行っている。筆者もアドバイザーとして参加し、学習会では毎回鳥の生態の解説をした。

最近、りんご園にフクロウのための巣箱をかける活動は、津軽地方をはじめ、他県でも行われるようになってきた。実は、りんご園にフクロウを呼ぼうという活動は、20 年ほど前に、ここ樽沢地区から始まり、全国的に注目された経緯がある。ただし、当時はりんごの木の洞にフクロウが棲んでいたので、巣箱はかけていない。巣箱をかけるようになったのは、りんごの老木が伐採されて若い木に代わり、フクロウが営巣できる洞がなくなってからである。

今から 20 年ほど前、青森市在住の蛯沢博行氏が浪岡の野沢地区のりんご園にフクロウが生息していることを発見し、その暮らしぶりを撮影していた。フクロウが営巣していたのは紅玉の樹齢 70 年の老木の洞であった。その木は老いて生産力も乏しいため、本来であれば伐られて新しい木に植えかえられるところであるが、農家の人たちはフクロウを大切に思い、木を伐らないでいてくれたのだ。

りんご園には木の根や皮をかじるノネズミが多かったが、フクロウはりんごの木に害をもたらすノネズミを捕食するため、農家にとってはありがたい存在だった。フクロウがノネズミを捕食するのでネズミの駆除剤は使わなくてすむし、フクロウがすんでいること自体がりんごの安全の保障ともなったのである。

このことがきっかけとなり、フクロウを生かした地域作りが始まった。農家と役場の連携によって約 20 人による「もほの会」（もほとは津軽弁でフクロウのこと）が立ち上げられ、フクロウの絵文字入りりんごや、フクロウグッズが販売されるなどの活動が行われた。フクロウの観察会やりんごもぎなどの体験活動も行われた。産業振興と環境保全の両立を地域ぐるみで目指したのである。

巣箱で育ったフクロウの雛

学習会の様子

2003（平成 15）年ごろになると輪がさらに広がって学習会なども行われるようになり、2005（平成 17）年に浪岡町が青森市と合併した後は、フクロウは「青森市の鳥」にも指定された。「もほの会」の活動は、農業と環境保全を見事に調和・融合させ、付加価値を生み出して産業振興を図るというすばらしい活動であったが、その後活動は縮小し、現在では浪岡駅の「あぴねす」にわずかに展示されるのみとなっている。以後、地域でもフクロウの姿を見ることは少なくなり、逆にノネズミの被害の話を耳にするようになってきた。

そんな 2017 年、もう一度フクロウを呼ぼうということで「樽沢里地里山を考える会」が結成された。会では会員全員のりんご園に 3 年間の活動で計 60 個の巣箱をかけ、2018 年 2 つがい、2019 年 2 つがい、2020 年 3 つがいの繁殖を確認している。フクロウを呼ぶために大事なのは、まずは餌があること。フクロウは雛 5 羽を育てる設定では 4～7 月でネズミ 1700 匹を捕まえる計算になるという。次に、営巣場所の近くに林があること。これは親鳥や巣立ち雛が隠れ場所を必要とするためである。

猛禽ポストに止まるノスリ

活動が軌道に乗ってきた会では、2019 年にはフクロウをデザインしたりんご箱を作ってりんごの発送を始めた。今後も活動を継続することによって、巣箱を利用するフクロウがさらに増えていくことを願っている。

▽猛禽ポストでノスリを呼ぶ

ネズミの害に悩まされるのは、りんご園だけではない。水田でもネズミが畦に巣を作るなどして害を与えている。しかし、夜行性で森林性のフクロウは水田までは出かけてくれないだろう。とすれば、昼行性で草原の様な環境でネズミを捕ってくれる猛禽の登場となる。そこで提案したのが、タカの仲間のノスリを呼ぶための「止まり木作戦」である。

津軽平野に多数生息しているノスリというタカは、オオタカのように積極的に獲物を追う狩ではなく、棒や電線の上に止まって地面をじっと見つめて、ネズミやモグラを発見すると襲いかかるという待ち伏せ型の狩りをする性質を持っている。

樽沢の人たちは手作りで止まり木を作り、水田に 10 本ほど立てた。しかも、同様の実践を調べ上げて、「猛禽ポスト」という名前を付けたのである。しばらく観察していると、ノスリを始め、チョウゲンボウという小型のハヤブサも猛禽ポストを利用していることがわかった。この地区は、昼はノスリが、夜はフクロウが目を光らせ、農作物をノネズミの被害から守っているのである。

2019 年 11 月、青森大学と台湾から来ていた学生たちによる「グローバル英語」の授業での訪問を受け、この会の活動を説明するとともに熱心な討議を展開することができた。この地区を通った時には、猛禽ポストに鳥が止まっていないかどうか、ぜひ観察してもらいたいと思う。

7. 青森大学付属総合研究所紀要・第 21 巻第 1 号／第 2 号

（2020 年 3 月 31 日発行）

電子ジャーナル・青森大学付属総合研究所紀要は、第 21 巻第 1 号・第 2 号の合併号が刊行されました。

第 22 巻第 1 号は、2020 年 8 月末投稿締め切り、9 月末刊行予定です。皆さまの活発なご投稿をお待ち申し上げます。投稿をご予定の方は、あらかじめご一報いただければ幸いです。

【研究論文】

・第二言語話者の多文化社会へ向けたコミュニケーショ

ンのあり方について：日本－台湾合同集中講義におけるコミュニケーション・ストラテジーの考察（鹿内史）、pp.1-13
【研究ノート】
・社会調査項目で生起される感情に起因する測定誤差の痕跡：特殊詐欺に関する内閣府調査結果に焦点をあてて（澁谷泰秀、吉村治正）、pp.14-25
・青森県と道南における観光の連携と課題 ―北海道新幹線開業を契機として－（櫛引素夫）、pp.26-40
・認知症地域貢献活動：青森オレンジ文化祭の実践と効果（大上哲也、甲斐英朗、大上今日子）、pp.41-45
・津軽地方におけるカンムリカイツブリの分布の拡大について（竹内健悟）、pp.46-51
【資料】
・「こどものまち」イベントにおける消防団の活動に関する実践報告（中沢翔馬）、pp.52-56

◇**総研日誌**（2020 年 3 月 11 日～5 月 31 日）

▽3 月 26 日（水）
・定例運営会議
▽3 月 31 日（火）
・紀要第 21 巻 1/2 号刊行
▽4 月 16 日（木）
・定例運営会議
▽5 月 21 日（木）
・定例運営会議

◇**編集後記**

「総研だより」2 年目の第 1 号をお届けします。赤坂道俊・新所長の就任挨拶に加え、各センターの活動状況・計画、そして客員研究員の寄稿が主な内容です。

ほぼ世界全域で猛威を振るい続けている新型コロナウイルスは、本学の教育、研究、社会貢献活動すべてに多大な影響を及ぼしています。青森県は、国内では感染者数が比較的少なかったとはいえ、亡くなられた方がおられます。謹んでご冥福をお祈りいたします。

本学は新年度からオンライン授業を導入し、不便な中にも、新たな学びの道が見え始めています。また、ほとんどの学会が、実際に参加者が集まっての学術集会を見合わせる一方、学会をオンラインに切り替えたり、これまでにないスタイルの研究集会やセミナーを開催したり、という新しい展開も急加速しています。

「ウィズ・コロナ」の時代、当面は新型コロナウイルスと向き合いながら、これまでと異なる営み・暮らしをつくりあげていかねばなりません。うなだれてばかりではなく、一連の「コロナ禍」を、少しでもポジティブな教育・研究の道標に置き換えられるよう、気持ちを切り替えて、前に進もうと決意を新たにしています。（素）